

## 社会的情報処理尺度の妥当性検討に関する試み

久木山 健 一<sup>1)</sup>

### 問題と目的

Dodgeの社会的情報処理理論は(Crick & Dodge, 1994; Dodge, 1986), 我々が社会的状況で出会う様々な場面を情報処理の対象と捉え, その情報処理の欠陥によって問題行動の生起を説明する理論である。Dodgeによる社会的情報処理モデルは, 以下の6つのステップからなるプロセスが想定されている。①符号化: 自己の内外に存在する手がかりを, 感覚過程を通じて受容し知覚することが求められる。②解釈: スキーマやスクリプトを照合しながら, 手がかりの心的表象化と解釈が行われる。③目標設定: 目標を作るか明確にすることが行われ, 不適切な目標を打ち立てたり追求することが問題とされる。④反応検索と構築: 長期記憶にある行動のレポーターから状況に適切な反応を検索する。⑤行動選択: 検索した反応の中から, 実際に行動に移す行動を評価し選択を行う。⑥行動実行: 選択された行動の実行が行われる。社会的情報処理理論では, 先行するステップが後のステップに影響を与えるプロセスを想定し, 最終的な行動の生起を説明するモデルとなっている。このように場面を想定した上で, 複数のステップからなるモデルを使用し検討を行うことによる利点は以下のとおりである。まず, これまで攻撃性や内向性, シャイネスなどといった安定した性格特性によって説明されてきた社会的不適応の原因を, 詳細に検討することが可能になることが挙げられる。またそのことにより, 行動の予測力が高まること, および不適応行動への介入の視点を見出すことが可能になることが挙げられている。

社会的情報処理の測定をCrick & Dodge (1994)では以下の3つに分類している。①仮想場面を使用した面接および質問紙による測定。②実際の行動場面においての面接による測定。③自己報告形式の検査による全体的な心理的構造の測定。①の仮想場面を使用した面接および質問紙の測定 (hypothetical situation interview

or questionnaire)の代表的な内容は以下のとおりである。まず, 子どもに社会的適応に関係があると仮定されている仮想的な対人状況を提示する。その後, 各ステップにおいての処理のパターンを示す反応を引き出すようにデザインされた質問を行う。対人状況の提示方法としては, 状況を被験者に読んだり, イラストを用いたり, プロが演じているビデオをみせたりすることで行われる。提示される状況の代表例としては, 仲間入り, 仲間からの挑発, 対人葛藤, 仲間関係開始, 仲間からの拒絶, 対象の獲得などが含まれる。この接近法は高度に状況に特化された反応を引き出すことが可能である。

②の実際の行動場面においての面接による測定は, ①の仮想場面を使用したものと類似している。しかし, 現実の行動を使用した面接であり, 子どもが実際の社会的経験を行っている際に質問に答えるという点で異なっている。Steinberg & Dodge (1983)では, まずソシオメトリック指名により攻撃的および非攻撃的な中学生の抽出を行った。その上で, 実際に積み上げられたブロックを他者により壊される, という状況を実際に経験させた上で社会的情報処理の測定を行っている。またDodge & Somberg (1987)においても, 録音されたものではあるが, 自己に対する敵意的な会話を聞かせ, 実際に脅威ムードを経験させるなどの操作を行った上で測定を行っている。③の自己報告形式の検査による全体的な心理的構造の測定に関しては, 場面の要因を考慮せず, 社会的情報処理を総合的に測定する手法である。以上3種の測定手法のうち, これまで使用されてきたものの大半は①の仮想場面を使用した面接および質問紙による測定法に属している。

またCrick & Dodge (1994)では, Dodgeの社会的情報処理理論に基づくこれまでの研究で使用されてきた統計手法を, 以下の3点にまとめている。①社会的情報処理のある1ステップを測定し, 分散分析や回帰分析を用いて社会的行動との関連を検討するもの②社会的情報処理のいくつかのステップを一度に測定し, 重回帰分析などを用いて社会的行動との関連を検討するもの③社会的情報処理のいくつかのステップを一度に測定し, 共

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程)

分散構造分析などを用いて、各ステップ間の関連に注目しながら社会的行動を予測するもの。これらのうち、③の分析手法を用いることにより、社会的情報処理モデルの時間的な性質についても明らかにすることが可能になり、かつモデルの更なる改定も可能になることが指摘されている。

共分散構造分析等の複雑な統計手法を使用するためには、比較的多くの被験者に対し、複数の社会的情報処理ステップを同時に測定することが必要となると考えられる。この視点をもとに先に挙げた社会的情報処理測定手法を比較すると、②の実際の行動場面においての面接による測定は、実際の場面を使用することにより、より実際の社会的情報処理に近いものが測定できるという利点が存在するが、多くの被験者を対象に行うことは困難であることが考えられる。また、これらの実際に問題状況や感情の操作を経験させる手法は、被験者に苦痛を与えるなどの倫理的な問題なども考えられる（片岡, 1997）。③の自己報告形式の検査による全体的な心理的構造の測定に関しては、性格特性などの測定と同様に、問題点の詳細な検討という利点が失われることが考えられる。これらのことを総合すると、①の仮想場面を用いた質問紙および面接による測定法、特に集団実施が可能な質問紙法による測定が有効であると考えられる。

これまでに本邦で行われてきた質問紙による社会的情報処理の測定は、おもに濱口（1992a）による測定法を参考にしたものが用いられてきている（久木山, 2000; 橋・田中, 1998）。この濱口（1992a）に代表される測定法の妥当性としては、濱口（1992b）において、小学生を対象とした質問紙形式の社会的情報処理尺度が、社会的望ましさの要因の影響を統制しても応答的行動を有意に予測可能であることが見出されている。久木山（2000）では、小学生・中学生・大学生を対象にした検討を行い、各学校種別に共通した因子がみられ、様々な年代において因子的妥当性を有することが確認されている。しかしその他の妥当性の検討はほとんど行われておらず、更なる検討が求められていると考えられる。そのため、本研究では、質問紙による社会的情報処理の測定の妥当性の検討を行うことを目的とする。

妥当性の確認の第1として、間隔尺度の質問紙による測定と、自由記述による測定との間の対応を検討する。これまでの質問紙による社会的情報処理の測定は、自由記述を求めその後分類を行い得点化を行うもの（Slaby & Guerra, 1988など）、名義尺度によるもの（Crick & Dodge, 1996など）、間隔尺度によるもの（濱口1992a; 久木山, 2000; 橋・田中, 1998など）が存在している。面接法によるものにおいても、自由な回答を求めその後

分類を行い得点化を行うもの（Milich & Dodge, 1984; Moore, Hughes, & Robinson, 1992など）、面接状況において器具などを用い間隔尺度による測定を行うもの（片岡, 1997; 中澤, 1996など）が存在する。先にあげた複雑な統計処理には、間隔尺度以上を要求するものが多い。そのため、本研究では、質問紙による間隔尺度での測定が、質問紙による自由記述の内容を反映しうるかについての検討を行う。また、社会的望ましさの混入に関しても、本研究の対象とする大学生においてはまだ確認されていないために、同時に検討を行う。

妥当性の確認の第2として、間隔尺度の質問紙により社会的情報処理を測定することによって、他の安定した要素に比べ、行動の予測力が高くなるかという、弁別的妥当性に関する検討を行う。Crick & Dodge（1994）では、社会的情報処理と他の要素とを比較し、人格特性、共感や視点取りなどの社会的認知単独などよりも社会的情報処理の方が、行動の予測において有効であることを示している。このうち人格特性に関しては、濱口（1994）において、児童の主張性、愛他性、攻撃性が、挑発場面における応答的行動に、社会的情報処理の媒介無しに直接的に影響を与えることが少ないことを見出し、行動の予測における社会的情報処理の優位性を実証している。しかし、同様の検討を行った橋・田中（1998）では、人格特性から直接的に応答的行動に影響をおよぼすパスが多く見出されており、これらの結果は錯綜している。そのため、安定的要因のうち、これまで取り扱われてこなかった要因と、社会的情報処理尺度による行動の予測力の比較を行うことが求められていると考えられる。本研究で使用する社会的情報処理尺度は、アサーション、アサーションの失敗による言語的攻撃および回避的行動の予測にも適する点に特徴がある（久木山, 2002）。そのため、アサーション行動に関連が高い性格特性としてシャイネスを取上げ、社会的情報処理による行動の予測との比較を行う。

「他者との関係や相互作用のために使われる技能（相川, 1996）」と定義される社会的スキルは、社会的情報処理で取り上げられる対人場面において、適応的とされる行動を予測することが考えられる。相川（2000）は様々な社会的スキルの定義を概観し、これまでの社会的スキルの定義には大きく分けて①行動的側面を強調するもの、②能力的側面を強調するもの、の2つが存在すると指摘している。そしてそれらを統合するものとして、両者を含んだ一連の過程と捉えることの利点を主張し、Dodgeの社会的情報処理理論を基本とした社会的スキルの生起過程モデルを提唱している。またこれまで本邦で多く使用されてきた社会的スキル尺度は、一般的な捉

え方で作成されている。これらのことを総合すると、本研究で作成した社会的情報処理尺度は、これまで多く使用されてきた社会的スキル尺度よりも、ある特定の場面における行動の予測力が高いことが考えられる。

以上のことより研究1では、質問紙による間隔尺度での測定が、質問紙による自由記述の内容を反映するかの検討を行う。また、社会的望ましさとの関連についての検討を行う。研究2では、アサーションおよびアサーション失敗としての言語的攻撃、回避攻撃行動の予測に対する、社会的情報処理尺度とシャイネス尺度、社会的情報処理尺度と社会的スキル尺度との比較を行い、弁別的妥当性の検討を行う。

## 研究1

### 目的

社会的情報処理尺度と自由記述との対応の検討を行い、社会的望ましさとの関連の検討を行う。

### 方法

**被験者：**岐阜県内の短期大学学生111名（男子45名，女子66名）平均年齢18.93（SD=2.01）。

**質問紙：**社会的情報処理の対象となる刺激としてPFスタディの図版1を使用し、以下の質問への回答を求めた。

(1) 社会的情報処理尺度：解釈ステップに関しては、敵意帰属、自責帰属、偶然帰属を測定する目的で作成された久木山（2000）の社会的情報処理尺度9項目を、PFスタディ刺激に対応できるように、相手を「車の運転手」と限定して使用した。目標設定ステップに関しては、友好性目標・主張性目標・問題解決目標を測定する目的で作成された久木山（2000）の社会的情報処理尺度9項目を、PFスタディ刺激に対応できるように、相手を「車の運転手」と限定して使用した。

(2) 自由記述による社会的情報処理の測定：まず、PFスタディの標準的な教示のもと、回答を求めた。次に、PFスタディに回答した理由について、「あなたが上で書き入れたように答えたのは何故ですか？この絵の情報だけでは判断しづらいために、様々な想像をはたかせて答えられたと思います。どのように考えて答える内容を決めたかを、下の空欄になるべく詳しく自由に書き入れてください。」という教示のもと回答を求めた。

①解釈ステップに対応する自由記述：(a)原因帰属：PFスタディ刺激への回答を導いた原因帰属を測定する目的で、「このような状況になってしまった原因は、どこにあると思いますか。想像して答えて下さい。」という教示のもと回答を求めた。(b)相手の性格：PFスタディ刺激への回答を導いた相手の性格の解釈を測定する目的

で、「あなたは、自動車の運転手はどのような性格の人であると思いますか。想像して答えて下さい。」という教示のもと、回答を求めた。

②目標設定ステップに対応する自由記述：(a)全般的目標設定：刺激に対する目標設定ステップを全般的に測定するために、「あなたは、この状況をどのようにしていきたいですか。想像して答えてください」という教示のもと、回答を求めた。(b)対人的目標設定：刺激に対する目標設定のうち、特に対人的なものを測定する目的で「自動車の運転手との関係をどのようにしていきたいですか。想像して答えてください。」との教示のもと回答を求めた。

(3) 社会的望ましさ尺度：社会的規範からみて望ましいとされる方向で設問に答える傾向を測定する目的で、北村・鈴木（1986）より作成された日本語版 Social Desirability Scaleより、短縮版に相当する10項目（以下、SDS10とする）を採用した。

## 結果と考察

### 1. 自由記述の分類

解釈ステップを測定する目的の自由記述において得られた回答に対して、以下の基準で分類を行った。①敵意帰属：原因帰属に関する2つの自由記述に対して、「原因の自由記述に車もしくは運転者に関する記述があるもの」「相手の性格をネガティブに解釈しているもの」の基準をもとに分類を行った。②自責帰属：原因帰属に関する2つの自由記述のうち、原因に関する自由記述に対して、「問題の原因として自己に関するものを挙げているもの」の基準をもとに分類を行った。③偶然帰属：原因帰属に関する2つの自由記述のうち、原因に関する自由記述に対して、「雨や道路状況などの自然状況」「車および運転者を原因として挙げており、かつ問題が起こることを回避しようとしたが不可能であったという記述」の基準をもとに分類を行った。以上の各原因帰属に対し、実験の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生による分類との一致率の検討を行った結果、一致率はそれぞれ敵意帰属 .86、自責帰属 .96、偶然帰属 .93であった。分類が一致しないものについては、協議のもとに決定および分類不能とした。

目標設定ステップを測定する目的の自由記述において得られた回答に対して、以下の基準で分類を行った。①主張性目標：全般的目標設定の回答をもとに、「積極的な主張行動を行う目標および主張行動が必要となる行動を行おうとする記述」の基準をもとに分類を行った。②友好性目標：全般的目標設定および関係性目標設定の回答をもとに、「相手との関係性の維持および発展を目指

社会的情報処理尺度の妥当性検討に関する試み

す記述」の基準をもとに分類を行った。③問題解決目標：全般的目標設定および関係性目標設定の回答をもとに、「問題状況においてなんらの行動も意図しないもの」という基準をもとに分類を行った。以上の各原因帰属に対し、実験の意図を知らされていない心理学を専攻する大学院生による分類との一致率の検討を行った結果、一致率はそれぞれ主張性目標 .79、友好性目標 .83、問題解決目標 .86であった。分類が一致しないものについては、協議のもとに決定および分類不能とした。

2. 社会的情報処理尺度の検討

社会的情報処理尺度：解釈ステップ尺度9項目に対して、主成分法による因子分析を行った。固有値の減衰状況 (3.60, 1.80, 1.30, .71...) より因子数を3と定め、再び主成分法、バリマックス回転を行った結果をTable 1に挙げる。想定した因子に想定した項目の負荷が高かったため、想定した項目をもとに各下位尺度得点を求めた。

信頼性を確認するために $\alpha$ 係数を算出したところ、敵意帰属 .80, 自責帰属 .84, 偶然帰属 .71であり、信頼性が確認された。

目標設定ステップ尺度9項目に対して、主成分法による因子分析を行った。固有値の減衰状況 (3.61, 1.83, .97, .65...) および固有値1以上の基準からは2因子が想定されるが、第3因子の固有値は1に近いことおよび解釈のしやすさより因子数を3と定め、再び主成分法、バリマックス回転を行った結果をTable 2に挙げる。想定した因子に想定した項目の負荷が高かったため、想定した項目をもとに各下位尺度得点を求めた。信頼性を確認するために $\alpha$ 係数を算出したところ、友好性目標 .80, 主張性目標 .71, 問題解決目標 .80であり、信頼性が確認された。

3. 社会的情報処理尺度と自由記述との対応の検討

社会的情報処理尺度得点と自由記述の対応の検討を行

Table 1 解釈ステップ尺度の因子分析

	敵意帰属	自責帰属	偶然帰属	共通性
4. 車の運転手は、人の気持ちを理解する事の出来ない人である	.90	-.05	-.18	.84
1. 車の運転手は、相手の事を考えることの出来ない人である	.87	-.17	-.17	.82
7. 車の運転手は、自分勝手な人である	.85	-.10	-.17	.77
9. このような状況におちいってしまった原因は自分の方にもある	-.12	.93	.07	.88
6. 自分の方も悪い面があるからこのような状況にある	-.09	.85	.27	.80
3. このような状況におちいらぬように自分が気をつけなかったからである	-.09	.79	.01	.64
5. 車の運転手は、わざとこのようなことをしているわけではない	-.21	.08	.84	.76
8. 車の運転手は、迷惑をかけようとしているわけではない	-.19	.05	.82	.71
2. 車の運転手は、別に悪気があってしているわけではない	-.09	.14	.67	.48
固有値	3.60	1.80	1.30	
寄与率 (%)	40.10	20.10	14.40	
累積寄与率 (%)	40.10	60.10	74.50	

Table 2 目標設定ステップ尺度の因子分析

	友好性目標	問題解決目標	主張性目標	共通性
1. 車の運転手を、嫌な気持ちにしたい	.80	-.03	-.06	.64
8. 車の運転手と、良い関係でいたい	.78	.28	.16	.72
3. 車の運転手と、関係を悪くたくはない	.75	.31	.01	.66
5. 車の運転手を困らせたくはない	.74	.19	-.19	.62
10. どうにかして問題を解決したい	.09	.86	.14	.74
12. どうにかしてこの状況をかえられるように努力したい	.21	.82	.06	.84
6. 状況が良くなるように努力したい	.49	.68	.18	.72
9. 車の運転手に何か言いたい	-.05	.02	.91	.76
7. 車の運転手に思っている事を伝えたい	-.01	.23	.82	.71
固有値	3.61	1.83	.97	
寄与率 (%)	40.10	20.30	10.80	
累積寄与率 (%)	40.10	60.40	71.20	

うために、敵意帰属、自責帰属、偶然帰属、友好性目標、主張性目標に関しては、基準にあてはまる記述のあるものを記述あり群、記述のないものを記述なし群とし、2群において、対応する社会的情報処理尺度の下位尺度得点に差があるかをt検定で検討を行った。その結果、いずれにおいても、記述有り群のほうが記述無し群に比較して、対応する社会的情報処理尺度の下位尺度得点が高いことが見出された (Table 3)。また、問題解決目標に関しては、基準に当てはまるものを該当群、基準に当てはまらないものを非該当群とし、対応する社会的情報処理尺度の下位尺度得点に差があるかをt検定で検討を行った。その結果、該当群のほうが非該当群に比較して、対応する社会的情報処理尺度の下位尺度得点が高いことが見出された (Table 3)。このことより、社会的情報処理尺度の各下位尺度得点は、自由記述の内容を反映していることが確認された。

#### 4. 社会的望ましき尺度との関連の検討

社会的情報処理尺度各下位尺度得点とSDS10得点との相関係数を求めた (Table 4)。その結果、敵意帰属、自責帰属、偶然帰属、友好性目標、主張性目標、問題解決目標いずれの社会的情報処理下位尺度との間の相関係数は有意とはならなかった。このことより、本研究で作成された評定尺度による社会的情報処理尺度は、社会的望ましきの影響を受けることが少ないことが示されたと考えられる。

## 研究 2

### 目 的

アサーションおよびアサーション失敗としての言語的攻撃、回避攻撃行動の予測に対する、社会的情報処理尺度とシャイネス尺度、社会的情報処理尺度と社会的スキル尺度との弁別的妥当性の検討を行う。

### 方 法

被験者：愛知県内の大学生401名 (男子262名、女子139名) 平均年齢19.02 (SD = .91) 調査時期：2002年4月。  
 質問紙：①Kiss-18：菊地 (1988) による18項目、5件法。②WSS：シャイネスを測定する目的で鈴木・山口・根建 (1997) によって作成された25項目、5件法。「行動 (積極性)」「感情 (リラックス)」「感情 (過敏さ)」「認知 (自信のなさ)」「認知 (不合理な思考)」の下位尺度からなる。③社会的情報処理尺度：久木山 (2000) をもとに、非常に疲れている深夜に友人から電話がかかってくる状況を文章により提示した上で、以下のステップの測定を行った。(a)解釈ステップ：敵意帰属・自責帰属・偶然帰属を測定した。6件法9項目(b)目標設定ステップ：友好性目標、主張性目標・問題解決目標を測定した。6件法9項目(c)行動実行ステップ：自分のことをまず考えるが、相手のことも考慮したアサーション (項目「今日は疲れていることを伝え、またの機会にしてもらえよう頼む。’)アサーティブでなく自分のことだけ考えて、他者を踏みにじる発言を行う言語的攻撃 (項目「こんな時間に電話をかけてくることに対して非難する。’)。アサーティブでなく、自分よりも他者を常に優先し、自分のこ

Table 3 自由記述各群における各社会的情報処理尺度得点の平均

	記述あり群			記述なし群			t 値
	Mean	(SD)	人数	Mean	(SD)	人数	
敵意帰属	3.04	(1.36)	33	2.07	(0.96)	73	3.72**
自責帰属	4.35	(0.79)	21	3.36	(1.12)	86	4.70**
偶然帰属	5.42	(0.81)	16	4.89	(0.99)	90	2.01*
主張性目標	4.26	(1.27)	29	3.53	(1.21)	78	2.76**
友好性目標	4.65	(0.81)	39	3.91	(1.09)	68	4.00**
	該 当 群			非 該 当 群			t 値
	Mean	(SD)	人数	Mean	(SD)	人数	
問題解決目標	3.46	(1.30)	24	4.50	(0.95)	83	-3.64**

\*\*p<.01, \*p<.05

Table 4 社会的情報処理尺度と社会的望ましき尺度の相関

	敵意帰属	自責帰属	偶然帰属	主張性目標	友好性目標	問題解決目標
社会的望ましき	.14	-.03	-.14	.05	.00	.05

\*\*p<.01, \*p<.05

とを後回しにするやり方である回避より2種類(項目:回避1「相手が話し終わるまで聞きつづける」回避2「早く切り上げようとするが、いえないままずるずる話を聞きつづける」)各1項目5件法を測定した。

## 結果

### 1. 尺度の検討

社会的情報処理尺度: 因子分析の結果, 研究1と同様の因子構造を示し, 想定した因子に想定した項目の負荷が高かったため, 想定した項目をもとに各下位尺度得点を求めた。信頼性は, 敵意帰属 .82, 自責帰属 .79, 偶然帰属 .75, 友好性目標 .84, 主張性目標 .80, 問題解決目標 .76であった。シャイネス尺度に関しては, 原尺度に基づき信頼性の検討を行った結果, 「行動(積極性)」.81「感情(リラックス)」.74「感情(過敏さ)」.62「認知(自信のなさ)」.71「認知(不合理な思考)」.56であった。社会的スキル尺度に関しては, 原尺度に基づき信頼性の検討を行った結果 .87であった。シャイネス尺度の一部に信頼性の低いものが存在したが, 分析の有効性から, 想定された項目をもとに各下位尺度得点を求めた。

### 2. シャイネス尺度と社会的情報処理尺度の比較

シャイネス尺度と社会的情報処理尺度の弁別力の相違を検討するために, シャイネス尺度各下位尺度, 社会的情報処理尺度の解釈ステップ, 目標設定ステップ各下位尺度を独立変数とし, 状況での行動4項目それぞれを従属変数とする重回帰分析を行った。結果をTable 5に挙

げる。アサーション, 言語的攻撃, 回避1に関しては, シャイネス尺度の各下位尺度は, いずれも有意な予測因とはならなかった。回避2に関しては「感情(リラックス)」が有意な正の予測因となった。社会的情報処理尺度に関しては, 偶然帰属が有意な予測因となることがなかったことを除けば, いずれの行動においての有意な予測因となることが多かった。このことより, シャイネス尺度より社会的情報処理尺度のほうが予測力が高いことが考えられる。

### 3. 社会的スキル尺度との比較

社会的スキル尺度と社会的情報処理尺度の弁別力の相違を検討するために, 社会的スキル尺度, 社会的情報処理尺度の解釈ステップ, 目標設定ステップ各下位尺度を独立変数とし, 状況での行動4項目それぞれを従属変数とする重回帰分析を行った。結果をTable 6に挙げる。言語的攻撃および回避2に関しては, 社会的スキル尺度による予測も可能となっている。しかし回避1およびアサーションにおいては, 社会的情報処理尺度においては有意な予測因となる測度が存在したが, 社会的スキル得点は有意な予測因となることがなかった。このことより, アサーションや回避1などといった行動の予測力は, 社会的スキルより社会的情報処理尺度の方が高いことが考えられる。ただし, 社会的情報処理によるアサーションの予測の内容を検討すると, これまでアサーションの正の予測因とされている友好性目標とアサーションの間では, 負の関係が示されている。このことは, 本研究で利用した場面において, アサーションであると設定した行

Table 5 社会的情報処理尺度とシャイネス尺度の比較

	言語的攻撃	従属変数		
		回避1	アサーション	回避2
敵意帰属	.21**	-.05	.21**	.14
自責帰属	.11*	-.13*	.02	-.10*
偶然帰属	-.09	.09	-.13*	.01
主張性目標	.24**	-.30**	.30**	-.15*
友好性目標	-.15*	.25**	-.11	.23**
問題解決目標	-.13*	.12	-.02	-.11
WSS: 「行動(積極性)」	.01	-.05	-.05	.04
WSS: 「感情(リラックス)」	.06	.02	.05	.21**
WSS: 「感情(過敏さ)」	-.02	-.02	-.03	.11
WSS: 「認知(自信のなさ)」	.10	.06	.02	.02
WSS: 「認知(不合理な思考)」	.05	-.07	.01	-.02
R	.45	.43	.44	.45
R <sup>2</sup>	.20	.18	.19	.20
F値	7.68**	6.85**	7.23**	7.65**

\*\*p<.01, \*p<.05

Table 6 社会的情報処理尺度と社会的スキルの比較

	言語的攻撃	従 属 変 数		
		回 避 1	アサーション	回 避 2
敵意帰属	.21**	-.04	.20**	.17**
自責帰属	.14**	-.13**	.05	-.09
偶然帰属	-.08	.10	-.11*	.02
主張性目標	.24**	-.28**	.28**	-.14*
友好性目標	-.11	.24**	-.12*	.26**
問題解決目標	-.10	.08	-.03	-.11
社会的スキル	-.18**	.02	.05	-.21**
R	.44	.42	.43	.40
R <sup>2</sup>	.20	.17	.18	.16
F 値	12.11**	10.26**	11.12**	9.11**

\*\*p<.01, \*p<.05

動が、関係を悪化させる行動として被験者に捉えられたことが考えられ、そのことにより社会的スキル尺度とアサーションの間に予測関係がみられなかったことも考えられる。本邦においてはアサーションは余りすべきではないネガティブなものに捉えられることも存在する(平木, 1993)。そのため、本邦においてのアサーションの定義を明確にした上での再検討が必要とも考えられる。

### 総合的考察と今後の課題

本研究の結果より、間隔尺度による社会的情報処理の測定によっても、これまで多く使用されてきた自由記述の分類による得点化と同様の測定が可能であることが確認された。質問紙による自由記述であり、面接による自由な反応を求めているという問題点が存在するが、面接との関連についても知見を与えることとなると考えられる。また、本研究で検討を行った質問紙による社会的情報処理の測定により、これまで社会的不適応の検討に多く使用されてきたシャイネス尺度、および社会的スキル尺度よりも、社会的情報処理尺度の方が行動の予測に有効であることが確認された。研究1および研究2では、異なった仮想の対人場面を使用し社会的情報処理の測定を行ったが、同様の因子構造がみられたことより、本研究で検討を行った社会的情報処理尺度は、様々な場面の社会的情報処理を、登場人物の名前を変化させることで使用できる尺度であることが考えられる。これらことより、社会的不適応の一般的な傾向などの検討、および詳細な検討が必要な被験者のスクリーニングなどの目的に、シャイネス尺度および社会的スキル尺度を使用し、より詳細なアセスメントおよび状況および詳細な要因に着目した介入の考案などに、質問紙による社会的情報処理尺度を併用するなどの使い分けが可能であろう。

中澤(1996)では、Dodge(1986)の記述をまとめ、

社会的情報処理の基本的性格および基本的仮説として以下のことを挙げている。①処理は急速になされる。モデルはあたかも子どもの頭の中にコントローラーがあり、多様なオプションを考えながら行っているようにみえるがこれは、メタファーである。②処理は無意識なされる。意識化は、課題が難しく新奇な反応が必要である時や、処理の意識化が求められるときにのみ生じる。③意識化された時と無意識になされた時の処理過程は変わらない。④各ステップは分割可能である。従って各々のステップを独立に測定できる。しかしステップは系列的であるので、あるステップの査定はそれまでのステップの処理と交絡する。⑤処理は状況によって変わる。処理は領域特殊的な性質をもち、その処理に対応した行動の予測力は高いが、様相の異なる行動の予測力は低い。⑥処理のステップは学習を通して獲得される。従って、発達水準により処理は変わる。あるステップの処理の欠陥をもつ子どもには、そのステップを訓練できる。

質問紙および面接による社会的情報処理の測定は、上に挙げた基本的性質および仮説の③および④をもとに行われている。しかし、それらの仮説については実際に証明されているわけではない。そのため、今後の社会的情報処理尺度の妥当性の検討には、上の仮説を証明することが重要であると考えられる。

### 文 献

- 相川充 1996 社会的スキルという概念 相川充・津村俊充(編)社会的スキルと対人関係 対人行動学研究シリーズ1 誠信書房
- 相川充 2000 人づきあいの技術—社会的スキルの心理学— セレクション社会心理学20 サイエンス社

- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1994 A review and reformation of social information-processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin*, 115, 74-101.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. 1996 Social information-processing mechanisms in reactive and proactive aggression. *Child Development*, 67, 993-1002.
- Dodge, K. A. 1986 A social information processing model of social competence in children. In M. Perlmutter, (Ed.), *The Minnesota Symposia on Child Psychology*, 18, pp.77-135. Hillsdale.
- Dodge, K. A & Somberg D.R. 1987 Hostile attributional biases among aggressive boys are exacerbated under conditions of threats to the self. *Child Development*, 58, 213-224.
- 片岡 美菜子 1997 攻撃および非攻撃児の敵意帰属に及ぼすムード操作の効果 教育心理学研究, 45, 71-78.
- 菊地章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 北村俊則・鈴木忠治 1986 日本語版 Social Desirability Scaleについて 社会精神医学, 9, 173-180.
- 久木山健一 2000 社会的情報処理と情動との関連に関する研究 神戸大学大学院総合人間科学研究科修士論文 (未公開)
- 久木山健一 2002 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連—アサーション行動を対象として— カウンセリング研究, 35, 66-75.
- 濱口佳和 1992a 挑発場面における児童の社会的認知と応答的行動との関連についての研究 教育心理学研究, 40, 224-231.
- 濱口佳和 1992b 仲間による挑発場面における児童の社会的情報処理と応答的行動に関する研究 日本発達心理学会第3回発表論文集, 77.
- 濱口佳和 1994 被害者児童の人格的要因(主張性, 愛他性, 攻撃性)がその社会的情報処理と応答的行動に及ぼす効果の検討 教育相談研究, 32, 45-61.
- 平木典子 1993 アサーション・トレーニング—さわやかな<自己表現>のために— 日本精神技術研究所
- Milich, R., & Dodge, K. A. 1984 Social information processing in child psychiatric populations. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 12, 471-489.
- Moore, L. A., Hughes, J. N., and Robinson, M 1992 A comparison of the social information-processing abilities of rejected and accepted hyperactive children. *Journal of Clinical Child Psychology*, 21, 123-131.
- 中澤 潤 1996 社会的行動における認知的制御の発達 多賀出版
- Slaby, R.G. & Guerra, N.G. 1988 Cognitive mediators of aggression in adolescent offenders: 1. Assessment. *Developmental Psychology*, 24, 580 - 588.
- Steinberg, M. D., & Dodge, K. A. 1983 Attributional bias in aggressive adolescent boys and girls. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 1, 312-321.
- 鈴木裕子・山口創・根建金男 1997 シャイネス尺度(Waseda Shyness Scale)の作成とその信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 30, 245-254.
- 橘 良治・田中奈津紀 1998 応答的行動に及ぼす攻撃性・愛他性と社会的情報処理の効果 岐阜大学教育学部研究報告 人文科学 47, 215-226.

(2002年9月30日 受稿)



ABSTRACT

A Study of Validity of Social Information Processing Scale

Kenichi KUKIYAMA

The purpose of this study was to examine the validity of social information processing scales. In study 1, 111 college students complete a questionnaire that assessed the social information processing in open-ended form and in scales, and social desirability scale. It was shown that social information scales reflected to description in open-ended form. None of social information processing scales had shown relations to social desirability scale. In study 2, 401 college students complete a questionnaire that assessed the social information processing in scale and shyness in scales and social skill in scale. Social information processing scales could predict social behavior (ex. assertion, verbal aggression, and avoidance behavior) more effectively than shyness scales or social skill scale. The results were discussed in terms of a validity of social information processing scale.